

教育学部生による小学校・中学校の歴史学習における  
長崎歴史文化博物館見学用ワークシートの作成の試みについて

堀井 健一\* 舛田 安史\*\* 松本 和寿\*\*\*

はじめに

長崎歴史文化博物館が2005年11月3日（木）に開館した。筆者のうちの堀井と舛田はその開館初日に博物館を訪問して、それが小学校・中学校・高等学校における歴史学習において利用する価値の高いものであることを認識した。

筆者のうちの堀井は、その訪問後、自身が勤務先で分担して担当する社会科指導法（歴史分野）の講義の中で受講生に対して長崎歴史文化博物館の見学を企画し、見学後に小学生または中学生向けの見学用ワークシートの作成を行なうよう指導した。講義の本来の目的は高等学校の地理・歴史分野のうちの歴史分野の教授法を講義することであるが、受講生が学校教育教員養成課程の初等教育コースおよび中学校教育コースの学生であるので、講義の狙いとは多少離れるがあえて小学生または中学生向けのワークシートを作成させることにした。学生による見学は2005年11月26日の午前中の約2時間半を当てたが、その中には初めに長崎歴史文化研究所研究グループ主任研究員の越中勇氏による講座室での博物館についての講義と館内巡回の案内が含まれる。当日の見学学生数は27名、その後の作成ワークシートの提出者は28名であった。それら2つの人数が異なる原因は、見学日に来館できなかった学生がいたことと見学はしたもののワークシート作成をしなかった学生がいたことのためである。

小学生または中学生の歴史の学習において長崎歴史文化博物館を利用することは、後述するように、有意義であろう。さらに、その利用の際に学習用ワークシートがあれば、博物館内の多種多様な展示物の中で効率的かつ効果的に歴史学習を行なうことができよう。なお、長崎歴史文化博物館のホームページにおいては「教育 学校の先生方へ」のホームページの中の「学校向けのプログラム」の記載事項の中に「◎ワークシート 見学用のワークシートを用意しております。見学時にご活用ください。」と開館当初から記載がある<sup>(1)</sup>が、2005年11月16日付けで見学を申し込む際に事前に電話で照会したところ、当該ワークシートはまだ用意できていない旨の返答を得た。それゆえ、学生によるワークシートの作成が参考例なしの状態で行なうことができるので、学生にとってそのワークシート作成

---

\*長崎大学教育学部国際文化講座。 \*\*長崎大学教育学部附属中学校。 \*\*\*長崎大学教育学部附属小学校。

の経験が将来、自身が長崎歴史文化博物館に児童または生徒を引率する際に大いに役立つと予想される。

本稿では、この度の学生による小学校・中学校の歴史学習における長崎歴史文化博物館見学用ワークシートの作成の試みについて、提出されたワークシートの作成状況を分析するとともに、課題提出時に学生によって回答してもらったアンケートの結果を通して学生が当該の博物館の何に注目してどのようにワークシートを作成したかを分析する<sup>(2)</sup>。その際、実際に学校現場で歴史教育に携わっている附属中学校と附属小学校から各1名の教諭がその分析に加わった。

第1章では学習指導要領における博物館の利用の意義を確認する。第2章では学生が長崎歴史文化博物館の展示物のうち何に注目したかをアンケート結果の分析を通じて明らかにする。第3章では学生が児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物をアンケート結果の分析を通じて明らかにする。第4章では学生による作成ワークシートの内容について批評する。そして、以上の試みを本稿の中で報告することによって、新たに開館した長崎歴史文化博物館の利用を考えている教育関係者の方々や博物館などの施設一般の関係の方々にとって参考となるような何らかの有益な示唆ができることを願う。

## 第1章 学習指導要領における博物館の利用の意義

初めに、現行の1999年の小学校学習指導要領の社会科において博物館の利用がどのようなところに意義があるかを簡単に確認したい。

小学校学習指導要領の「第2章 各教科」の中の「第2節 社会」の「第2各学年の目標及び内容」の「第6学年」の「2 内容」では、「(1)」の記述の中で遺跡や文化財、資料の活用に言及があり、その解説記事においては「地域の博物館や郷土資料館などを利用して文化遺産について学芸員の話を開くことが「歴史的事象を具体的に理解する上で有効な学習」であるとされている<sup>(3)</sup>。また、学習指導要領の「第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い」の中の「1」の「(3)」では「博物館や郷土資料館等の活用を図る」と言及があり、その解説記事においては「博物館やその他の施設」を「積極的に活用して、社会科の見学や調査活動を行うことは、児童の意欲や学習効果を高めるうえで極めて重要である」し、またそれらの積極的な活用によって「児童の知的好奇心を高め、学習への動機づけや学習の深化を図ることができる。また、諸感覚を通して実物や本物に触れる感動を味わうことができる」と、さらにはそれらを利用した学習を通して博物館などの役割や活用の仕方についてや、その関係者の働き、保存・管理の意味について気付くようにすることが大切であるとされている<sup>(4)</sup>。加えて、「2 内容」の「(1)」に戻るが、その「エ」の中で「キリスト教の伝来」が、その「オ」の中で「鎖国」、「蘭学」、「新しい学問が起こったこと」が挙げられて

おり、とりわけ「オ」の解説記事においては鎖国については「キリスト教の禁止や海外との貿易の統制などが行われたことを取り上げて調べ」ること、蘭学については「杉田玄白がオランダ語の医学書を翻訳して『解体新書』を著したこと」が記述されている<sup>(5)</sup>。『解体新書』の現物が長崎歴史文化博物館で展示されていることもあり、これらの事項の学習への動機づけやその深化はその博物館への訪問によって十分期待できるであろう。

次に、現行の1998年の中学校学習指導要領の社会科において博物館の利用がどのようなところに意義があるかを簡単に確認したい。

中学校学習指導要領の「第2章 各教科」の中の「第2節 社会」の「第2各分野の目標及び内容」の「歴史的分野」においては、まず「3 内容の取扱い」の「(2)」の「イ」において「身近な地域の歴史を調べる活動」に関係して「地域の特性に応じた時代を取り上げるようにするとともに、人々の生活や生活に根ざした文化に着目した取扱いを工夫すること。その際、博物館、郷土資料館などの活用も考慮すること」が言及されている。博物館の活用については、歴史的分野の「1 目標」において「文化遺産」、「歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ、我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせる」こと、「身近な地域の歴史」が言及されていることから、とりわけ長崎歴史文化博物館を利用する意義が十分にあると言えよう。「2 内容」においては、「(4)近世の日本」の中で「ヨーロッパ人の来航」、織豊政権の「当時の対外関係のあらまし」、「鎖国政策」と「鎖国下の対外関係」、「地方の生活文化」とその「現在との結び付き」、「新しい学問・思想の動き」が言及されている。中でも「鎖国下の対外関係」の件は、「3 内容の取扱い」の中の「(5)」の「ウ」において「オランダ、中国との交易のほか、朝鮮との交流」についても扱うようにすることと言及されている。学習指導要領の解説では、「ヨーロッパ人の来航」については「キリスト教宣教師が日本にもキリスト教を伝えたことを扱う」と、織豊政権の「当時の対外関係のあらまし」については「東南アジアとの積極的な貿易、キリスト教への対応」などに着目させると、「鎖国政策」と「鎖国下の対外関係」については「幕府によるキリスト教の禁止、外交関係と情報の統制」に気付かせることや「長崎でのオランダ・中国との交易、対馬を通しての朝鮮との交流」を扱うことと、「地方の生活文化」については「身近な地域の生活に根ざした衣食住、年中行事、祭礼などを通して見ていくように」することとされており、さらに「新しい学問・思想の動き」については「蘭学」が言及されている<sup>(6)</sup>。身近な地域の生活に根ざした年中行事、祭礼に関連して長崎歴史文化博物館には「長崎くんち」のコーナーがある。それゆえ、これらの学習においても当該の博物館が大いに関わることができると言える。

## 第2章 学生が関心を持った博物館の展示物について

今回の学習ワークシート作成の課題ではアンケート調査を行なった。アンケートの設問は、「(a) あなたが一番関心を持った展示物は何ですか?」、「(b) 児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物は何ですか?」、「(c) ワークシートを作成する時に一番工夫をしたところはどういうところですか?」、「(d) 博物館の見学およびワークシート作成について感想を述べて下さい。」の4つである。

本章では上記の「(a) あなたが一番関心を持った展示物は何ですか?」の設問に対するアンケート回答から学生が関心を持った長崎歴史文化博物館の展示物を分析することを試みる。下記に学生が一番関心を持った展示物としてアンケート用紙に記載したものを列挙する。ただし1人が複数回答している場合がある。なお、列挙の仕方は、博物館の2つのゾーンの各コーナー別とし、各コーナーの区分けは博物館のリーフレットに記載の分類に従った。

〔歴史文化展示ゾーン〕

〈大航海時代〉

南蛮屏風（2人）

〈中国との交流〉

唐人屋敷図・映像（1人）

唐寺・媽祖に関する展示物（1人）

眼鏡橋の模型（中国との交流の1例）（1人）

〈町民文化体験ステージ〉

町民文化体験ステージ（1人）

〈長崎くんち〉

諏訪神社御供町道行之図（2人）

〈オランダとの交流〉

出島の役割（1人）

オランダとの関係・交流を示す絵画、展示物（4人）

「日本人の目がとらえたオランダ」コーナー（2人）

川原慶賀の絵（1人）

蘭館図絵巻の情報モニター（2人）

『暦象新書』（1人）

蘭癖の欄（1人）

〈日本の近代化と長崎〉

ニュース形式の長崎の外交コーナー（1人）

「日本の近代化と長崎」コーナー（1人）

[長崎奉行所ゾーン]

〈ゾーン全体〉

復元された長崎奉行所（博物館自体，展示室，石がき・石段の遺構を含む）（6人）

〈犯科帳の世界〉

犯科帳（モニターを含む）（2人）

〈キリシタン関連資料〉

キリシタン関連資料（踏絵・マリア像を含む）（3人）

〈長崎奉行所立体劇場〉

長崎奉行所立体劇場（1人）

〈お白州〉

長崎奉行所による裁きの寸劇（3人）

以上のように学生が一番関心を持った展示物としてアンケート用紙に記載したものを列挙したものを数値化して整理して表にすると下記のとおりになる。

表1 学生が一番関心を持った展示物

歴史文化展示ゾーン		長崎奉行所ゾーン	
大航海時代	2	ゾーン全体	6
中国との交流	3	犯科帳の世界	2
町民文化体験ステージ	1	キリシタン関連資料	3
長崎くんち	2	長崎奉行所立体劇場	1
オランダとの交流	12	お白州	3
日本の近代化と長崎	2		

アンケート回答では1人が複数回答している場合があるので、学生が一番関心を持った展示物の多寡を単純に述べることはできないが、あえて分析してみる。学生が一番関心を持った展示物の中では「オランダとの交流」コーナーのものを挙げた件数が突出して多いことが分かる。この結果には、学生たちにはやはり出島の存在が長崎の歴史のシンボルとして映っていることや彼らが国際理解とその教育に関心があることが背景にあると考えられる。2番目に多く挙げられたものは、長崎奉行所の復元物であった。それには展示室としての和風の座敷部屋、お白州、石段の遺構が含まれるが、博物館の建物自体が奉行所の復元であるので、このことが学生を引きつけたようである。

### 第3章 学生が児童または生徒に伝えたい博物館の展示物について

本章では上記の「(b) 児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物は何です

か？」の設問に対するアンケート回答から学生が関心を持った長崎歴史文化博物館の展示物を分析することを試みる。下記に学生が一番関心を持った展示物としてアンケート用紙に記載したものを列挙する。

〔歴史文化展示ゾーン〕

〈長崎貿易〉

出島出土物・輸出物の実物（1人）

〈中国との交流〉

石造アーチ橋（1人）

〈貿易都市長崎〉

バーチャルウォークシアター（「寛文長崎図屏風」町歩き）（1人）

寛文長崎図屏風（1人）

長崎町ナビ長崎惣町絵図を歩く（1人）

〈美術展示〉

美術品・工芸品（1人）

〈長崎くんち〉

諏訪神社御供町道行之図（1人）

くんち（精霊流しの伝統を含む）（2人）

〈オランダとの交流〉

貿易に関する展示（1人）

オランダとの交流（交流による科学・文化・芸術を含む）（1人）

オランダ商館長及び商館医（1人）

『解体新書』（2人）

蘭癖の欄（1人）

出島図（1人）

〔長崎奉行所ゾーン〕

〈ゾーン全体〉

復元された長崎奉行所（博物館自体，展示室，石がき・石段の遺構，瓦，障子を含む）（5人）

〈長崎奉行所立山役所〉

奉行所の役割（1人）

石燈籠（1人）

〈キリシタン関連資料〉

キリシタン迫害時代の遺物（踏絵，マリア像，無原罪の聖母を含む）（7人）

〈長崎奉行所立体劇場〉

## 長崎奉行所立体劇場（1人）

以上のように学生が児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物としてアンケート用紙に記載したものを列挙したものを数値化して整理して表にすると下記のとおりになる。

表2 学生が児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物

歴史文化展示ゾーン		長崎奉行所ゾーン	
長崎貿易	1	ゾーン全体	5
中国との交流	1	長崎奉行所立山役所	2
貿易都市長崎	3	キリシタン関連資料	7
美術展示	1	長崎奉行所立体劇場	1
長崎くんち	3		
オランダとの交流	7		

アンケート回答では1人が複数回答している場合があるので、学生が児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物の多寡を単純に述べることはできないが、あえて分析してみる。学生が児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物の中で一番多く挙げられたものは、「オランダとの交流」コーナーのものと「キリシタン関連資料」コーナーのもの7件である。学生が「児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物」は、前章の中の学生が「一番関心を持った展示物」とは異なっており、小学校または中学校の歴史の授業と深く関わる事柄であることが予想される。それゆえ、アンケート回答者の学生たちはかかる重要性を認識して江戸時代における鎖国の中の長崎・出島の交易とオランダとの交流や織豊政権から江戸時代初期のキリシタンとその弾圧を児童・生徒に学習させることを主として意識したと思われる。

ところが、学生たちがどのような主題の下で見学用ワークシートを作成したかを見てみると、前述のこととは様相が異なってくる。今回のワークシート作成の課題においては、あらかじめ講義者が中学生用のテーマ3つと小学生用のテーマ4つを指定して学生にそれらの中から1つを選択させてワークシートを作成させた。指定されたテーマごとにそれに取り組んだ学生数を示すと下記の表のとおりになる。

表3 あらかじめ指定されたテーマとその学生数

中学生用のテーマ		小学6年生用のテーマ	
(1) 長崎学としてのオランダとの交流	4	(1) 長崎奉行所を知ろう！	13

(2) 開国，江戸幕府の滅亡，明治維新と長崎	3	(2) 長崎にある中国を見つけよう！	2
(3) 江戸期の長崎人の生活と文化	0	(3) 出島のオランダ人の生活発見！	4
		(4) 江戸時代の長崎人の暮らしを知ろう！	2

前述のとおり，学生が児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物では「オランダとの交流」コーナーと「キリシタン関連資料」コーナーのものを挙げた件数が同数の7件で一番多かったが，他方，ワークシート作成時に学生が選択したテーマは長崎奉行所のものが半数近くを占めた。講義者はあらかじめテーマを指定する際に中学生用のテーマとして長崎奉行所を挙げなかったが，その理由は，中学生用のテーマを本来選択すべき中学校教育コースの学生の人数が少ないのでテーマ数を増やすとばらつきが出てワークシートの評価の際に比較・検討がしにくくなると予想したからである。それゆえ，講義者は中学生用のテーマを歴史文化展示ゾーンに関係するものだけに限定したわけである。ところが，課題の提出の結果は，ワークシートの作成の作業の中で長崎奉行所を扱った学生が，講義者の予想とは異なって，多かったのである。

ここで，ワークシートの作成の際に長崎奉行所を扱った学生が多かった原因を考えてみたい。第1に，長崎奉行所ゾーンの中にはキリスト教禁教令に関する展示物はいくつかあるからである。前述のとおり，学生が児童または生徒に一番伝えたいと思った展示物の中では「キリシタン関連資料」コーナーのものが「オランダとの交流」コーナーのものと等しく1番目に多かった。それゆえに，このコーナーの展示物を扱えるテーマを選択した学生が多くなった。第2に，昨年11月の見学日にお白州でお裁きを再現する寸劇が行なわれ，ほとんどの学生が参観してとても印象に残ったらしいことである。第3に，博物館の建物自体が長崎奉行所の外観を再現したものであるため，そのことが開館してまもない博物館を初めて目にした学生たちに影響したと思われる。そして第4に，長崎奉行所の歴史を学ぶことができる場所としては長崎歴史文化博物館がほぼその唯一のものであることにより，学生が教師としてその博物館での校外学習を想定した際に長崎奉行所を主題として扱うことがより好ましいと判断したと推測されることである。

#### 第4章 学生による作成ワークシートの内容についての批評

今回の学習ワークシートの作成の課題は，ワークシートの分量としてA4判3－4枚程度とすることを学生に指示した。紙幅の関係で学生たちが作成して提出した長崎歴史文化博物館見学用のワークシートをすべて紹介することはできないが，本稿の末尾に作成例を2点だけ紹介しておく（図1，図2）。



下記に学生による作成ワークシートの内容について批評したいことや彼らのワークシートを一覧した後で気づいたことをいくつか述べたい。

[全体的な面について]

・ワークシートの作り手が児童・生徒をどういうイメージで描いているかが要点となる。つまり子どもの状況を考えてワークシート自体の狙いを設定し、例えば、興味を持たせるもの、次に調べさせるもの、比較させるものというふうに分けや使い分けを行なうことができれば良い。

・設問形式に流れ、学習の狙いがはっきりしないものが多い。博物館では展示品が多種多様であるため、ワークシートの内容の主題を絞ることが必要であろう。

[児童・生徒に何を書かせるかについて]

・クイズ形式や一问一答式が散見されるが、教科書を読んでも答えられるものではなく博物館で調べて記述させる問いを工夫した方が良い。せっかく博物館を利用しようというのであるから、博物館の展示物を見ることから引き出せることを問うべきである。

・一问一答式に陥らずに自由記述欄が設けられているものは好感が持てる。子どもが博物館で調べて答えを書き写しただけで勉強した気にさせるものは避けた方が良い。博物館で調べることと博物館で体感する、気づく、考えることの2つの要素がワークシートにあると良い。

・博物館訪問前に予想を立てさせる箇所があるワークシートは良い。また、博物館訪問前に児童・生徒の持っている知識を書かせて次に訪問後にまた書かせることによって子どもに自身の変容や成長に気づかせるものも良い。

・単純な一问一答式や年表式の答えを書かせるのは学習の最初の段階で、次に比較させて違いに気づかせる記述式に発展させ、さらに最終的にはワークシートを離れてノートを持って調べさせるのが理想的であろう。

・感想を書かせる箇所で「見学してどうでしたか？」と発問しているものが見受けられるが、その言い回しでは何がどうしたのかが不明確で受け手は戸惑うであろう。「どんな感想を持ちましたか？」などと具体的に書くべきである。

・初歩的なことであるが訪問日や氏名などの記入欄を設けることや、見学中はメモ程度にしておいて見学から帰ってからノートにまとめましょう、などと児童・生徒の学習の動きを具体的に描いてワークシートを作成する工夫が必要である。

・調べた後の要点整理の場を設ける工夫が欲しい。

[授業の組み立てについて]

・歴史が苦手という子もいるので、小・中学生はやはり歴史に興味を持ってもらうことを狙うのも良い。小学生には展示物を体感させるワークシートが良い。

・長崎歴史文化博物館は展示物やコーナーがたくさんあるので主題を絞りにくい

ため、学校現場では1回目にオリエンテーション的なものを、次に児童・生徒が興味を持つ主題に絞ったものをワークシートとして用意するのが良いかもしれない。

・学校現場でのワークシート作りは、学習の流れや単元の構成に沿って用意すべきである。その際、例えば、江戸幕府がなぜ長期政権になったかを問うてその関連でキリスト教禁教、鎖国政策、出島、長崎奉行所のあり方に気づかせ考えさせるワークシートが考えられる。

〔博物館職員の利用について〕

・学校である程度学習させたうえで博物館実習をさせると効果があるだろうから、ワークシート作りでは博物館の職員の意見を聞くのも手である。

〔他所との関連づけについて〕

・長崎では例えば出島に関するものは復元された出島の観光地の方が博物館よりも体験学習に向いている。そこで、博物館と他の遺跡、記念館、史跡などと組み合わせた学習のためのワークシート作りが考えられる。他方、奉行所関係のものは長崎歴史文化博物館にしかないものと言える。

・キリシタン関係のものは長崎歴史文化博物館よりも、例えば、日本二十六聖人記念館の方が展示内容が充実している。ワークシートの中でさらにどこに行けば詳しい資料に出会えるかが明記されていればなお良い。

・長崎の歴史に関して今までにない視点から長崎歴史文化博物館において学べる場所は奉行所ゾーンであろう。奉行所は城とは違いイメージしにくいのが、博物館はそれを復元しているので、また犯科帳などの展示物からその役割を学びやすい。ワークシートの作成ではこの点を生かして欲しい。

〔児童・生徒への配慮について〕

・総じて小学生・中学生の学習漢字、学習内容への配慮が足りない。特に小学生向けワークシートがそうである。

・館内写真撮影禁止のため写真掲載は無理があるが、図示による工夫がもっと欲しい。

〔学習内容について〕

・奉行所ゾーンの場合、現代的な洋風建築には無い書院造りなどの確認の場として活用して欲しい。特に昨今はマンションの増加により伝統的な和風の部屋などが減ってきているので。

・出島の輸入品は、なぜそれが輸入されたか、何のためにかと、さらに深く追求したものがあればもっと良かった。輸入品にはただ珍しいだけではなく、当時は我が国に技術がなく産出できないもの、自然環境により産出できないものがあるので。

・出島の場合、オランダ船がインドネシアから季節風を利用して来日してきたこ

とに気づかせるものがあれば良かった。鎖国下のオランダ船は滞在期間に社会的制約があるのでそれだけでは適切とは言えないが、それ以前のポルトガル船は季節風を利用して6・7月頃に長崎へ来航した。季節風は、東アジアにおける日本の自然環境を気付かせるうえで良い材料となろう。

## おわりに

今回、2005年11月の長崎歴史文化博物館の開館を機に教育学部生に対して小・中学校の児童・生徒による長崎歴史文化博物館の訪問時に使用する学習ワークシートを作成させる試みを行なった。校外学習の手段として博物館を利用することは、上記の第1章の中で確認したように小学校・中学校の社会科系の学習指導要領の中で促されており、さらには高等学校の学習指導要領の地理歴史の中の、例えば日本史Bの中でも、「2 内容」の「(1)歴史の考察」の「ア 歴史と資料」の中の「(イ)資料にふれる」において「博物館などの施設」が挙げられている。それゆえに、今後は学校現場で、新たに開館した長崎歴史文化博物館を活用した校外学習向けのワークシート作りが模索されることが予想される。かかる状況の中で、今回、教職に就く前の教育学部生に対して当該博物館に関連する学習ワークシート作りに取り組みさせた試みは意義あるものであったと思われる。実際のところ、教育実習は別として、教育学部の授業の中で学生に模擬授業を行なわせる試みが行なわれているが、今回のワークシート作成の課題に際して回答を得たアンケートの結果においてもこのワークシート作成の試みが子どもたちの目線を意識した教材作りの練習の機会になったので有意義であったとの感想を記した学生が複数いたので、今回の試みは教員養成系学部の講義の中での教員養成の一手法として意義あるものであったと思われる。

今後は、今回の課題のように授業担当者があらかじめ学生に学習ワークシートの主題を提示するのではなく、その主題の設定段階から学生に自主的に取り組ませるやり方や、長崎歴史文化博物館のみを校外学習の対象とするのではなく他の、博物館の近辺の遺跡、史跡などとも組み合わせた学習ワークシートの作成に学生を取り組ませるやり方を試みたいと思う。

## 註

(1) URLは<http://www.nmhc.jp/kyouiku/teacher/index.html>である。

(2) 長崎歴史文化博物館を利用した学習については、竹内有理「博物館における学習とその評価をめぐって」『歴史地理教育』2006年2月号、695号(2006年)22-29頁があり、特に27-29頁が「4 長崎歴史文化博物館の事例」に当てられている。その中では団体で来館した高校1年生の感想が掲載されているもの

の、見学用ワークシートについては言及が無い。

(3) 文部省『小学校学習指導要領解説 社会編』（日本文教出版，1999／2002年）86－87頁。

(4) 前掲書，128－129頁。

(5) 前掲書，94－95頁。

(6) 文部省『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説－社会編－』（大阪書籍，1999／2002年）96－100，102頁。

図1 学生が作成した学習ワークシートの例1

（作成者 松尾勇哉，テーマ「出島のオランダ人の生活発見」，3頁分のうちの1－2頁）

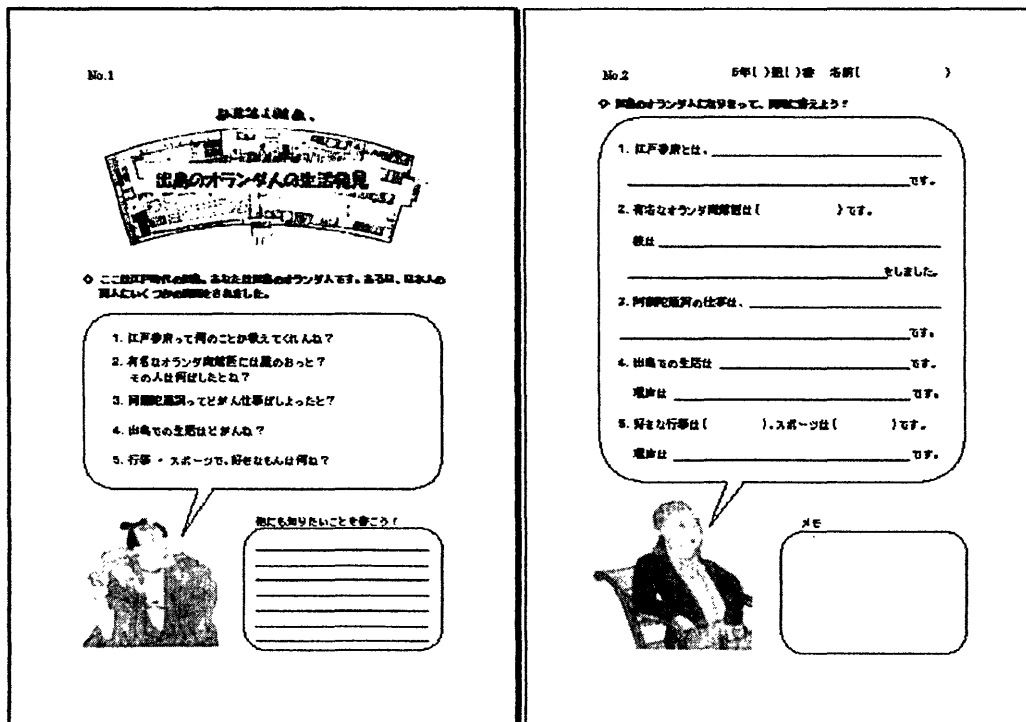


図2 学生が作成した学習ワークシートの例2

(作成者 高本悠希, テーマ「長崎奉行所を知ろう!」, 4頁分のうちの1-2頁)

